

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：14602
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2013～2015
課題番号：25370284
研究課題名(和文)近代英国における女性の偉人伝 研究

研究課題名(英文)Women and Biography in Early Modern England

研究代表者
齊藤 美和 (SAITO, Miwa)
奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：90324962

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：近代英国において、伝記は社会的・政治的・宗教的に重要な役割を担う文学ジャンルであった。本研究は、女性の伝記、特に偉人伝に焦点を合わせた。女性の伝記研究といえばこれまで日記や書簡といった私的な自伝的書き物の調査が中心であったが、本研究では、伝記の中でも特に公的・社会的性質の強い偉人伝を中心に据え、公に出版することを目的に書かれた伝記を研究の対象とし、女の一生がどのように記録され、讃えられたかを、主として伝記的小説、頌詩、聖人伝の3つの観点から考察することによって、書くのも書かれるのも主として男性であった伝記という文学ジャンルに占める女性の位置を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In early modern England, biography was a literary genre that assumed socio-political as well as religious roles. The study focuses on 17th century auto/biographical writings on and by women in terms of its firmly established generic tradition. Current studies of women's biographies tend to centre on their private writings such as diaries and letters; this study explored auto/biographical works intended for publication, revealing how women's lives were publicly commemorated in the male-centred genre of biography.

研究分野：人文学

キーワード：伝記 女性 イギリス 近代 偉人伝

1. 研究開始当初の背景

本研究は、齊藤（研究代表者）がこれまで二〇年近くに渡って行ってきた伝記研究の延長線上にある。著書 *Political Lamentation: The Funeral Elegy in Early Modern England, 1603-1660*(2002)や、過去の科学研究費補助金による研究「キリスト教世界における子どもの殉教研究」(平成22～24年度)等が、本研究課題に至るきっかけとなった。

(1) 近年、女性の伝記研究は第一次文献の発掘を含め、目覚ましい成果をあげ、数多くのアンソロジーや研究書が出版されているが、日記や書簡といった私的な自伝的書き物の調査・研究が中心であった。これは近代において「何者でもない」女の一生が公に語られ、記録される機会が限られていたことを考えるならば、当然のことであるといえよう。しかしながら、女性が書いた伝記、あるいは女性について書かれた伝記のなかでも、特に公的性質の強い伝記は、確かに数は限られてはいるものの、ジェンダー学の視点からのみならず、伝記文学全体を包括的に研究する上で、見過ごすことのできない重要な研究対象であると考えに至った。

(2) 伝記の中でも特に偉人伝は、近代英国において社会的・政治的・宗教的に重要な役割を担うジャンルであった。齊藤はこれまで、聖人伝(hagiography)のひとつである殉教者伝や、頌詩の代表的なジャンルであるエレジーなど、故人を追悼し、讃える伝記的言説について長年、研究してきた。その過程で、書くのも、書かれるのも、主として男性である偉人伝は、確かに女性とはなじみにくいジャンルであるが、女性がその対象となるに足ると考えられ、積極的に記録されるケースがあることに気がついた。こうした伝記を取り上げ考察することで、近代社会において女の一生がどのように公に語られ、意義づけられたのかを明らかにできないかと思えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、女性の伝記のなかでも特に公的・社会的性質が強く、出版された(あるいは出版を前提に書かれた)伝記に的を絞り、文学的伝統のみならず、社会的背景に照らして考察することで、近代の伝記的著作に占める女性の伝記の位置を探ることを目的とした。本研究では、とりわけ偉人伝というジャンルに着目し、女性が男性によって築き上げられてきた伝記の文学的伝統にどのように対峙したか、また、女性が後世に語り継がれるべき「偉人」としてどのように讃えられ、その人生がどのように意義づけられているかについて、具体的に作品を取り上げ分析することとし、以下の3点を研究の主たる目的として

進めた。

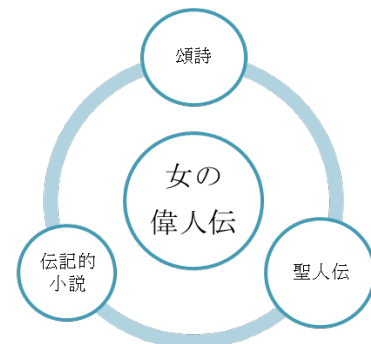
(1) 女性の偉人伝について考察を深めるうえで重要な自伝あるいは伝記を取り上げ、調査・研究を論文にまとめ、学会誌などで公表する。

(2) 今後の伝記並びにジェンダー関連の研究に資するよう、第一次文献の翻訳あるいは概説を行い、学会誌などで公表する。

(3) 偉人伝という観点から女性の伝記・自伝を研究するために、第一次文献の一般的な調査と整理を行う。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、まず、偉人伝の伝統のなかに占める女性の伝記の位置を確認するために、下の図のように、伝記的小説、頌詩、聖人伝の3つの柱を設定し、次いでそれぞれの領域との関わりから考察するに適切と思われる具体的な伝記についての調査を行い、その調査・研究の結果を踏まえ、論考をまとめることで、女の偉人伝についての研究を進めることとした。



(1) まずは女性の自伝・伝記に関わる第一次資料の調査から始めた。国内で利用できる電子データベースを有効に利用しつつ、入手困難な文献については、国外の図書館で調査・研究を進めた。

具体的には、上記の「伝記的小説」という観点から調査するにあたっては、フィクションであるロマンスと伝記との関わりに着目し、近代初期に書かれたロマンス風自伝とも称すべき著作について、英国 British Library で国内で入手困難な第一次文献の調査を行った(Sir Kenelm Digby や Edward, Lord Herbert of Cherbury の自伝など)。これについては、RA との共同作業で文献の整理を行った。

「聖人伝」との関わりから考察するにあたっては、特に聖女伝についてのこれまでの研究を押さえるべく、第二次文献の調査を中心に国内外の図書館で調査を進めた。

また、「頌詩」については、女性の死を悼

んだエレジーについて、第一次文献を中心に英国の図書館で調査を進めた。

(2)さらに、調査の過程で、今後の伝記研究において重要と思われる女性の伝記を翻訳し、概要をまとめた。

(3)(1)の文献の調査結果を踏まえ、女性の偉人伝研究において特に重要と思われる作品を選んで考察を進め、女の生涯がどのように讃えられ、また生前のどのような行いや徳が俟うべきものとして謳われているかについて、研究を行った。また、自伝については、Spiritual Autobiography についても研究の対象とした。

4. 研究成果

(1)「自伝による自己形成についての研究」己の人生について書くというプロセスが、書き手にとって、とくにその者が様々な意味においてアウトサイダーである場合には、社会における自己を確立していくための手段となっていたことを、Margaret Cavendish と John Bunyan による2つの自伝から明らかにした。

人の一生についての事実を記録する伝記と、若い娘の恋愛と結婚を軸に展開する娯楽的なフィクションであるロマンスは、いわば対極にあるジャンルである。しかしながら、この性質を異にする二つのジャンルは、互いに作用しあい、互いの常套やモチーフを取り込み、分かちがたく絡み合ってきた。ロマンスとの関わりから女の自伝の特質を考察するにあたり、近代初期の女性には珍しく出版を念頭に自伝を書いた Margaret Cavendish に着目した。Cavendish の自伝 “A True Relation of my Birth, Breeding and Life” は、彼女の著書 *Natures Pictures* (1656) の巻末に添えて出版された。本研究では、この自伝と著作集に収められたロマンス作品との相互補完的な関係を明らかにし、女流作家 Cavendish が自伝においてはアンチ・ロマンティックなヒロインとしての著者像を提示する一方で、ロマンスにおいては実人生では叶わなかった自己顕示を実現していることを論じ、当時の女性作家が公に自己を描く際の作法を明らかにした。本研究については、著書(共著『十七世紀英文学を歴史的に読む』)で論考「自伝風ロマンス、ロマンス風自伝 マーガレット・キャベンディッシュのわたし語り」として公表した。

Margaret Cavendish の自伝 “True Relation” を翻訳し(前編) 学術誌で公表した。(本邦初訳)

近年の自伝文学においては顕著なジャンルであった Spiritual Autobiography について研究を進め、前研究課題からの継続的研究として、John Bunyan の自伝 *Grace Abounding to the Chief of Sinners*(1666) についてその研究成果を口頭発表および論

文で公表した。論文では、この内的自伝において Bunyan が神に裁かれる罪人として振る舞いながらも、執筆当時彼がおかれていた獄中の受難者としての姿が常にそこに重なり合うように描き出されていることを論じ、自伝によって殉教者としての自己を形成していくプロセスを明らかにした。本研究は今後、女性の書き手による Spiritual Autobiographies の研究につなげていく予定である。

(2)「無名の女の伝記に関する研究」近代初期において、公の功績・名声とは無縁であった女性の一生が、社会においてどのように意義づけられてきたのかを探るために、当時全く無名で取り立てて何を成すこともなく15歳足らずで死去した少女を追悼した John Donne の *Anniversaries*(1612) を取り上げた。追悼詩は一般的に、悲嘆、賛美、慰めの3つのパートからなるが、特に賛美は故人の生前の美德や功績について語るため、偉人伝的側面が顕著である。本研究では、あえて無名の少女の追悼詩を考察することで、女を偉人として讃える際の一種の「型」を抽出しようと試み、この追悼詩を聖女伝との関わりから分析し、女性の偉人伝の特質を明らかにした。研究は学術誌に公表した。また、本研究の過程で、一般的に「処女期」「婚姻期」「寡婦期」の3つのステージに分けて語られる女性の伝記的言説において、それぞれのステージを称えるために用いられるレトリックについての研究を、聖人(女)伝と頌詩の伝統に照らしつつ、行った。

(3)「女の為政者の伝記についての研究」エリザベス一世についての伝記的言説について調査を進め、フランシス・ベーコンによるエリザベス一世についての回顧録 *The Felicity of Queen Elizabeth*(1651) の概要をまとめ、公表した。

(4)(1)~(3)の調査・研究により、伝記の包括的な研究へと結びつけることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

齊藤美和、(研究ノート)「女王の伝記 Francis Bacon, *The Felicity of Queen Elizabeth*」『英語学英米文学論集』、査読無、42巻、2016、印刷中

齊藤美和、「無名少女の偉人伝 ジョン・ダン『周年追悼詩』」『欧米言語文化研究』査読無、3巻、2015、71-91

(http 登録中 http://hdl.handle.net/10935/***)

齊藤美和、(翻訳)「マーガレット・キャ

ベンディッシュ「著者の生い立ちと人生
についての真実の話(1656年)前編」、『欧
米言語文化研究』、査読無、2巻、2014、
113-124

(<http://hdl.handle.net/10935/3929>)

齊藤美和、「殉教者を演じる魂 パニヤン
の内的自伝『溢れる恩寵』についての考
察」、『欧米言語文化研究』、査読無、1
巻、2013、59-76

(<http://hdl.handle.net/10935/3700>)

〔図書〕(計1件)

齊藤美和(ほか12名、10番目)、金星堂
『十七世紀英文学を歴史的に読む』、査読
有、2015、233-252(「自伝風ロマンス、
ロマンス風自伝 マーガレット・キャ
ベンディッシュの わたし語り」)(図
書総ページ数:298)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齊藤 美和 (SAITO, MIWA)
奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授
研究者番号：90324962

(2) 研究分担者

該当なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

該当なし ()

研究者番号：